高等小學修身

文學博士重野安繹編輯

卷一

検定申請本

K120.1
29.1
1

K120.1
29.1
1

文學博士重野安繹編輯

高等小學修身 卷一

東京　八尾藏版

緒言

一本書は、教育に關する　勅語の御主意に基き、小學校令第一條に掲ぐる、道德教育及國民教育に、必須なる德性を涵養するを以て、主意とす。

一本書は、每冊、勅語の御主意を表体し、小學生徒の年齡に應じ、其の程度を酌量し、諸般の德性を實踐躬行せしむるを以て、主意とす。

一本書に掲ぐる俚諺茹言は、簡短にして口調善く、且意味の解し易きものより、次第に、高尚なるものに及ぼし、求に其の典據を掲ぐ。

一本書の事實は、生徒の、解し易き寓言及本邦先賢故人の傳記より始め、間、我が國体に害なき支那西洋の事實を交ふ。

一本書は、一事項を教授するの方法を、主とし、事實より入りて、俚諺茹言に收め、專、歸納法に資る。

一假名文字は、片假名より、平假名に及ひ、平假名は、變体を用ひず。漢字は、字畫の少きものより、漸次、多きものに及び、言語は、勉めて卑近にして、解し易きものを用ふ。

一本書の挿畫は、故實を正し、最も品格善く、最も趣味に富むものを擇み、生徒をして、德行上の觀念を惹き起さしめんことを勉めたり。

一本書の教授法等に就きては、別に教師用に於て、之を詳悉し、以て教授の任に當る諸氏の參照に供す。

明治二十五年五月

編者識ス

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

孝行

巳之助といふ者、孝心ふかかりけり。其の父、手紙をはいたつする使をするを以つてなりはひとしけるが、巳之助、十

三の時、父病にかかりければ、巳之助、代りて、其の職をなし、遠き所までも、往きかよひ、ろの間に、父をねんごろに、介抱して、怠ることなかりければ、此の事、遂に、上にきこえ、はうびとして、米をたまはれり。

父母ノ恩ハ、海ヨリモ深ク、山ヨリモ高シ。（大和俗訓）

友愛

顧憲成、處州の令たりし時、兄弟、相争ひて、うつたへ出づるものあり。憲成、其の人倫をやぶることをなげきて、厚くさとし聞かせ、又、二本の杖を出だして、「相互に、頭を打て。」と、命ぜり。兄弟、之に由りて、深く感じて、其の非を悔い、「此の後は、心を改めて、むつま

しくすべし」と、言ひて、退きけるが、是より、身を終るまで、相愛して、少しも、爭ふことなかりけり。

センガウ（纖毫）ノ利ヲ以ツテ、骨肉ノ情ヲソコナフコト勿レ。（方孝孺）

交友

會津（あひづ）侯の老職、田中三郎兵衛は、菅（すげ）勝兵衛と、極めて親密に交れり。一日、

役所にて、公事を議し、意合はずして、互に顏色をかへて、激論せしかば、人人之を見て、二人の交も、是より疎遠ならんと、云ひ合へり。然るに、田中は、宅に歸り、菅を招きて、談笑すること、平日と、異なることなく、其の後に至りても、交情、益親密なりき。

君子ノ交ハ、道義ヲ以ツテ合ヒ、志氣ヲ

以ツテ親ミ、淡キコト水ノ如シ。故ニヨクク久シ。（習是編）

正直

淺野長政、かつて、豐臣秀吉に從ひて、駿河の國に至れり。時に、石田三成、人のうはさを聞きて、德川家康の二心あるよしを、秀吉に告げたり。秀吉、之を信じて、まさに、かへらんとしければ、長政、其の僞なるよしを述べて、秀吉をいさめり。又、秀吉、自、往きて、朝鮮を征伐せんとする時、秀吉の怒をも、かへりみずして、之をいさめ止めしことあり。

君子ハ、正直ニシテ、疑ハズ。直言シテ、違マズ。（本多正信）

守分

程婆(ほどばば)は、よく、其の身の分限を守り、常に、只、ひとり住みて、糸をつむぎ、又、人にやとはれなどして、世をすごせり。然れども、其の直を受くるには、其の身に使ふほど、もらひて、多くあたふれども、ことわれり。常に、人に語りて、「物には、すべて、分限あるものにて、分限をこゆれば、わざはひを、招くものなり。」と、云ひけるが、其の衣服飲食など、一に、分限を定めて、之を越にざりき。

吉ハ、足ルコトヲ知ルヨリ、吉ナルハナク、苦ハ、願多キヨリ、苦ナルハナシ。(素書)

貞操

ツネ女は、鹽谷(しほのや)某の妻となりけるが、間もなく、夫は、狂疾を發して、汚き事、

危き事、一として、せざることなし。殊に、ツネ女を、あしらふこと、尤、荒荒しく、刃を以つて、逼りなどして、身に、きずの絶ゆることなきほど

なり。父母、之をふびんに思ひて、かへさんとすれども、聞かずして、心をつくし、夫を介抱し、遂に、其の疾を、いにさせけり。

女ハ、貞順ヲ尚ブ。（孔子家語）

忍耐

本木昌造、或る時、西洋活版術の巧なるにかんじ、此の法を、我が國に、取り

用ひんことを思ひ立ち、之が爲、種種に辛苦して、やうやく、發明する所ありて、之を製造せしに、尚、あしき所ありければ、百方、心を苦め、更に、屈せずして、益、之を改良し、遂に、今日の如き、印刷の盛大を致せり。

モシ、敢テ、着實ニ、努力シテ、事ヲ做サバ、何ゾ、成ルコトナキヲ、患ヘンヤ。（傳家寶）

沈着

張浚（ちやうしゅん）は、つねに、苗傅（びやうふ）と、ぎろん、相合はずして、仇の如くなりければ、傅、人をつかはして、浚を殺さんとせり。時に、浚、ひとり、庭前をながめ、居たりしに、刺客、刃をさげて、うかがひよれど、浚少しもさわがず、後をかへりみて、「汝は、苗傅の刺客ならん。速に我が

首を取れ」と、云ひければ、其の人、深く
浚の大度にかんじて、立ち去れり。

安重深沈ノモノハ、ヨク大事ヲ處ス。（從政名言）

習慣

ロプト、ピールは、人に立ちこにたる
程の性質も、なかりけり。然るに、父
は、毎日、ピールに説話を教へ、又、たぼ
にらるる程づつ、説法を暗誦せしめ

けり。之により、久しきをつみて、心
を用ふること、習慣となりければ、つ
ひに、名高き辯舌家となれり。

習慣ハ、自然ノ如シ。（孔子家語）

剛毅

齋藤實盛は、平維盛に從ひ、源氏を北
陸道に攻むるとて、將に京都を出立
せんとするにのぞみ、平宗盛に見に、

打死のかくごをかたりて、錦の直垂を乞へり。軍、敗るるに及び、獨留りて、源氏の一將、手塚光盛と、相打ちて、つひに、殺されけるが、出陣

の前に、若武者に、侮られんも、恥かしとて、鬚鬚を墨にて、染めたりとぞ。

丈夫ノ志、窮シテハ、益堅カルベク、老イテハ、益壯ナルベシ。（馬援）

從順

徐積、或る時、學を胡安定に受けんとて、安定に見にけり。其の時、積のかしら、少しくかたむきければ、安定、之

を叱りて、直くせしむ。　積之を感ドて、ひとり、思ふやう、「直をたつとぶは、唯、かしらのみならず。　心も、亦、直くせずばあるべからず。」とて、是より後、よく、其の邪心をたちけり。

父母長上ノ教誡ハ、首ヲ垂レテ聞キ、議論スベカラズ。（朱熹）

惜陰

石多仲は、よく、學問を勉強し、其の机に向ふ座の下、之が爲に、くぼめるほどなり。　毎年十二月に至れば、こよみ一冊をかひて、之をかはやの中のかべに、はりつけ置き、かはやに行く時は、來年十二箇月間の支干時令などを、あんきせり。　常に云へるやう、「こよみを見るは、かはやに行く時な

れば、別に時間をついやすことなし。」と。

大禹ハ、聖人ナルモ、寸陰ヲ惜メリ。衆人ハ當ニ、分陰ヲ惜ムベシ。（陶侃）

博愛

依田伊右衛門は、ごひ深き人にて、貧しきものを救ふを以つて、上なきたのしみとせり。或る凶作なりし年、

食を乞ふもの來れば、皆、之を己の家に、留めおきて、之に食物を、あたへけり。其の中に、一人、癩病にかかれるものありければ、別に、小屋を建てて、入れ置き、日日、食を送れり。かくの如くなりければ、之がために、生活せしもの、多かりしと云ふ。

世間第一ノ好キ事ハ、難ヲ救ヒ、貧ヲ憐

ムニ、如クハナシ。（小兒語）

改過

雄略天皇、かつて、葛城山に獵し給ひける時、ゐのしし、向ひ來りければ、舍人に射殺せと、のたまひしに、舍人、怖れて、さけければ、ゐのしし、天皇にふれ奉らんとせり。然るに、天皇、御勇武に、まーまーければ、御足をあげて、

けころし給へり。獵、やみて、後、天皇、舍人を切らんとし給ひしに、皇后、いさめ奉りたまひければ、天皇、大に、喜び、「獵者は禽を獲、朕は、獨、善言を得て、歸る。」と宣ひて、舍人をゆるし給へり。

ヨク、人ノ言ヲ用ヒ、人ノ諫ヲ聞クモノハ、必、過寡ク、行正シ。（大和俗訓）

節儉

黒田孝高は、十二萬石の大名なりしが、よく、節儉をつとめり。或る時、日根野高吉、故ありて、借りたる金を、孝高に返さんとて、持ち行き

けり。此の時、孝高、鯛をもらひければ、其の骨をあつものにして、高吉に供しけるに、高吉、心に、之をいやしめり。然れども、金を返すに及び、孝高、受取らざりければ、高吉、深く、之を感じけり。

儉ヲ以ツテ、用ヲ足セバ、憂ニ遠カル。（國語）

敬師

冉伯牛は、孔子を師として、學べり。其の病む時、孔子、之を見舞ひければ、主君の禮を以つて、孔子をたふとび、移りて、南のまどの下に臥せり。これ、君たるもの、臣の病を視る時、必、南面するに因り、孔子をして、亦南面せしめんとてなり。然るに、孔子は、其の禮にあたらずして、まどより、其の手を執りて、之をなぐさめられけり。

道ヲ教フル師ハ、其ノ恩最重シ。君父ト同ジク、尊ブベシ。（貝原篤信）

公平

呂夷簡宰相たりし時、范仲淹、しきりに其の過を攻めければ、つひに、之がために、官をたとされけり。其の後、時の天子、仲淹を召しかへさんとせ

しに、夷簡其の賢者なることを、言ひ立てて、之を高き位に、すすめけり。仲淹、之に感じ、前日の事を言ひて、わびけるに、「すぎ去りし事は、何とて之を念ふべきや。」と、答へけるとぞ。

至公ニシテ、私ナキハ、國士ノ常風ナリ。（元正天皇詔）

寛恕

稲葉迂齋は、度量弘き人なり。其の頃、山宮維深、唐崎彦明と云ふ、二人の學者あり。學力、さまで、深きにあらざれど、共に才あるを以つて、人を輕蔑せしが、迂齋には、敬服して、つひに、其の弟子となれり。後、二人、或は死し、或は逐はれ、朋友となても、かへりみざりけるに、迂齋、ひとり、之を救ひけり。

ヨク、容ルルモノハ、大器ナリ。（王文成）

孝行

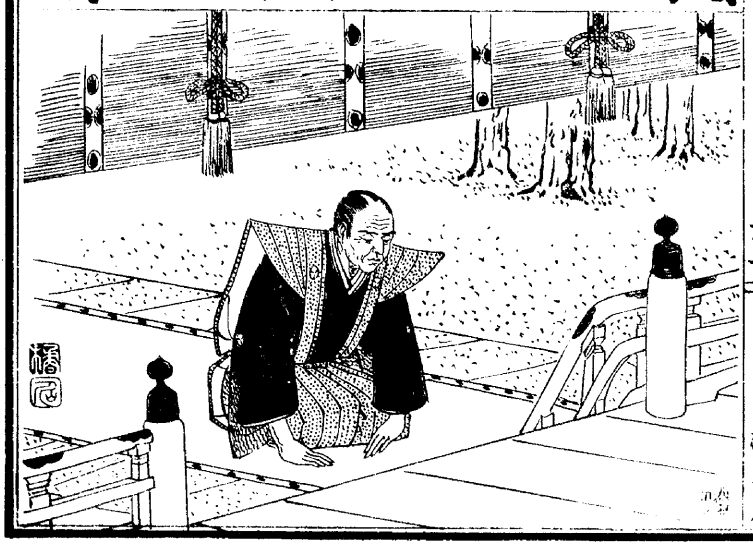
喜左衛門は、父母に事へて、あつく孝養をつくせり。　或る凶作の年に、己が衣食は、乏しかりけれども、父母をば、少しも、飢ゑこごえさせざりき。父、死して、後、母、盲となりければ、殊に、あつく介抱し、且、亡き父に事ふるにも、生けるが如く、其の志、もつとも厚かりければ、遂に、上より、之を賞せられけり。

生ニ事フルニ、力ヲ盡シ、死ニ事フルニ、思ヲ盡ス。（孔子家語）

禮敬

梶定良は、徳川家光の家士なり。　家光、みまかりて、下野國、日光山に、はう

むりければ、定良、從ひ行きて、此に留り居ること、四十七年なりき。其の間日日、朝早く起きて、身を清め、廟に赴き、廟の前に、正しく座し、



たゞとびうやまふこと、生ける主に、事ふるが如し。年、老いて後は、かごに乘りて、まうでけれども、門に入る時は、必徒歩し、又杖をつくことも、なかりけり。

禮ハ、人ノ幹ニキナリ。禮ナケレバ、立ツコトナシ。（左傳）

友愛

大竹重吉は、重兵衛の弟にして、他の家をつぎけるが、兄弟、むつまじく、日日往來せり。　重吉の妻、之をいとひ、二人の中を、へだてんと、さまざまに、重兵衛の事を、あしく言ひけり。　然るに、重吉は、少しも、心にかけずして、益〻たしみければ、妻も、遂に、之にかんじ、其の罪をわびて、身の行を改むるに至れり。

本源ハ、同一體ナリ。各、謙和ヲ、心トセヨ。（傳家寶）

立志

新井君美、はじめ貧しかりければ、「醫を業とし、又は、手習を教へて、自給せよ」と、すすむるものあり。　然れども、君美、之に從はずして、專心を學問に注ぎて、少しも怠らず。　常に、人に語

りて、「大丈夫、生れて、封侯を得ずんば、死して、閻羅王とならん。」と、云ひけるが、後、幕府に仕へて、筑後守に任ぜられ、大に、其の名を擧げたり。

人ハ、須ラク、先、志ヲ立ツベシ。志、立テバ、根本、成ル。（謝良佐）

勉職

道首名は、筑後守となりて、肥後の國

をも、兼ね治めけり。　常に、人民に生業をすすめ、耕種をうながし、菜菓をうゑさせ、雞豚などをやしなはしめて、一一、其の宜を得せしめけり。　又、時時、自、巡りて、教に從はざるものあれば、之をばつし、又陂池をきづきて、灌漑の便利をひろめけり。　されば、人人、其の利をかうむりて、首名の名、

四方に高く聞こ、死するに及びて、人民、祠を立てて、之を祀れり。

官事ヲ處スルハ、家事ノ如クス。（呂承中）

愛國

徳川幕府の末に、アメリカの軍艦、始めて我が國に渡來し、人心さわがしかりき。此の時、吉田松蔭、ひそかに、外國の事情を探りて、之に對する計

策をめぐらさんと思ひ、ひとり奮つて、其の軍艦にのりこみ、外國に赴かんことを企てけり。然れども、事、成らずして、押し込められけるが、幕府の處置を怒り、之を討たんことを計り、事あらはれ、囚へられて、遂に斬られけり。

己ノ私ヲ先ニシテ、天下ノ慮ヲ後ニス

ルコト勿レ。（方孝孺）

勤王

楠正元は、勤王の志、いと深かりき。或る時、足利義滿を、刺さんとして、伺ひけるが、義滿の家士に、之を知るものあり、兵を以て、かこみければ、正元、ふるひたたかふと雖も、かなはずして、遂に、捕へらる。　義滿、之をさとして、「吾に降らば、富貴を得させん。」と、云ひければ、正元、大に怒り、「南朝の勢、ふるはず、降るはたろか、死すとも、尚、其の罪、あまりあり。」とて、屈せ

ざりしかば、遂に殺されけり。

君ニ仕ヘテハ、忠ヲツクシ、私ヲ忘レヨ。
我ガ身ヲ顧ルコト勿レ。（初學訓）

自助

川村瑞軒（かはむらずいけん）は、はじめ、車力を業とせしが、或る時、自奮つて、畿内に赴き、身を立てんと思ひて、出立せり。然るに、途中にて、或る人、之をいさめて、「身を

立つるは、江戸にまさる處なし」と、云ふを聞きて、引きかへせり。やがて、品川に來りけるが、盆の靈祭に用ひし、瓜や茄子などの、川に流るるを見て、之を拾ひ、鹽漬として、うりければ、之がために、大金をまうけけり。又、江戸、大火の時、人に先ちて、木曾山（きそやま）の材木をかひ占めなどして、遂に、大な

る富を致せり。

人ニ望ムモノハ、至ラズ。人ニ恃ムモノハ、久カラズ。（狐卷子）

勤業

ペロザートンは、生れつき、勤勉にして、儉素をたふとびけり。はじめ、甚、貧しくして、或る製造場に出で、少しの賃銀を受けて、はたらきけるが、よく、業務を勉めはげみて、儉約しければ、數十年の後には、つひに、富める身となれり。斯くして、富める身となりけれども、衣食住などは、少しも奢らずして、益、家業を勉めはげみけり。

財祿ヲ得ルコトヲ好マバ、家業ヲヨク勵ハゲムベシ。（貝原篤信）

養生

ロイスコルナロは、四十歳に至るまで、多量に飲み食ひしければ、常に、多病にして、快き日とては、まれなりき。然るに、或る醫師のいさめに從ひて、飲み食ひを節しければ、是より、健康の人となれり　或る時、高き所よりたちて、大きずを受けしが、しばらくにして、全く愈に、八十三歳の時にて

も、山に登り、馬に乘りなどして、精神、活潑なりき。

飲食ヲ節シテ、其ノ身ヲ養フ。（畜德録）

和順

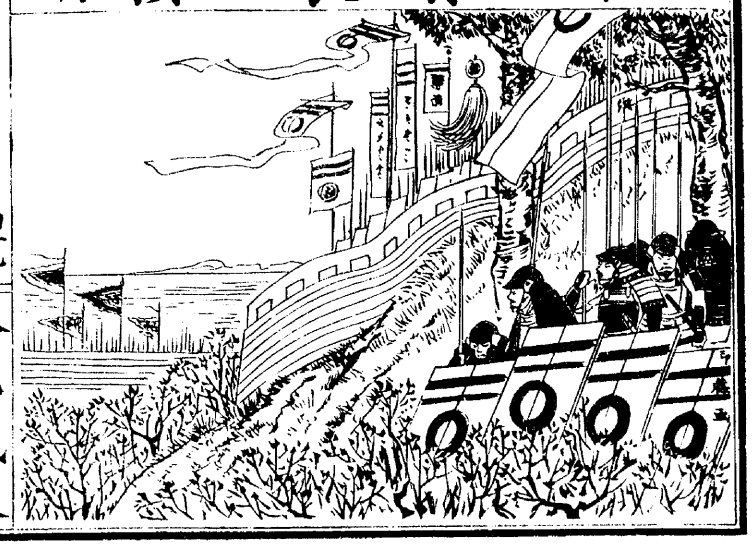
鈴木宇右衛門の妻は、和順にして、慈悲の心も、亦、深かりき。　凶年の時、宇右衛門は、家財、田畑などを、ことごとく、賣り拂ひて、うゑたる人を救ひけれ

ば、妻も、衣服手道具など、一切賣り拂ひて、其の費用をたぎなへり。　又、或る雪の日、あはれなる小女、來りて、食を乞ひければ、之を不便に思ひ、其の娘にさとして、きたる衣服を、一枚ぬきて、あたへさせけり。

女ハ、和ギ順ヒテ、貞心ニ、ナサケ深キト、靜ナルトヲ、ヨシトス。（女大學）

信義

加藤清正は、淺野長政と、交りけるが、朝鮮征伐の時、長政、其の子幸長の身の上を、氣づかひて、清正に賴めり。　或る時、明



の大軍、幸長を蔚山城にかこみ、幸長、大に危うかりければ、清正之を聞き、わづかの兵を以つて、赴き救はんとせり。人人、其の危を見て、止めければ、清正、答へて、「長政のたのみあり。假令、敗るるとも、いかでか救はざらんや」と、云ひて、遂に、赴きて、明の大軍を敗り、幸長を救へり。

言ハ、輕シク說クベカラズ、亦、輕シク、諾スベカラズ。但、一說一諾ノ後ハ、更ニ改ムベカラズ。（傳家寶）

誠實

魯宗道、或る日、他出せ一折、時の天子、使者を以つて、宗道を召せり。宗道、しばらくの後、醉ひて、かへりければ、使者は、「公の、朝に出づること、たゞけ

れば、如何に、答へ奉らん。」と云ふ。　宗道答へて、「唯、實を以つて、答へ奉れ。」と、云ふ、　使者「さすれば、公の、罪せられんことを恐る。」と、云ひけるに、「君をあざむくは、大罪なり。」と答へけり。　天子、之を聞き給ひて、是より、深く宗道を信任し給へり。

其ノ意ヲ誠ニスルハ、自欺クコトナカレトナリ（大學）

廉潔

谷平（たにへい）、かつて、市に行く途中にて、財布を拾ひければ、市に至り、たとし主をたづね出だして、之に問ひけれども、「我は、れとさず。」と、答へけり。　谷平、よりて、其の家に至り、「君のれとしに、相違なし。」とて、財布を出だしけれど

も、「一旦れとしーものは、我が有に非ず。」と、云ひて、取らざりけり。　谷平、止むことを得ず、之をたきて、走り出でければ、其の人、之を追ひけれども、遂に及ばざりき。

廉者ハ、其ノ有ニ非ルモノヲ求メス。（臣軌）

尊長

孔融（こうゆう）は、幼少の時より、禮義、正しくして、常に長者をうやまへり。　四歳の時、兄と、梨を食ふに、毎に、其の小きものを取りて、大なるものを、取らざりければ、人、あやしみて、其の故を問ひけるに、融、答へて、「我は、小兒なれば、小きものを食ふこそ、道理なれ。」と、云ひしとぞ。

長幼、序アリ。（孟軻）

報恩

稻葉迂齋は、十三歳の時、學問のせずばあるべからざることを、聞きて、大に感じ、是より後、伴部安崇、佐藤直義の教を受けて、學問をはげめり。後に、佐藤直方を師として、其の學問やうやく成就し、名を著しけるが、伴部、佐藤の二人を敬ひて、年賀の禮、暑中

の見まひなど、幼時の如くして、二人の死するまで、常にたがはざりけり。

恩ハ、終身永ク佩ブベシ。（韓詩外傳）

嚴肅

古賀精里は、生れつき、嚴密にて、人に不善あれば、まのあたり、之を規し、退いて、かげ言を云ふことは、少しもなかりしとぞ。或る日、某侯の老臣、重

罪の處分方を、精里に問ひければ、精里、兩三日の後、行きて、之を告げけり。然るに、老臣は、「先日は、唯、はなーぐさまでに、言ひーなり」と、云

ひければ、精里、大に怒り、「一國の政を執りて、人の命を、はなーぐさにするとは、何事ぞ。」と、なじりければ、侯、出でて、之が爲に謝ーして、やーうやく、止みけり。

起居座立、務メテ端莊ナルヲ要ス。（朱熹）

謹慎

徳川齊昭は、生れつき、つつーみふか

き人なり。　かつて、徳川幕府に、忌れて、押し込められし時、白衣を穿ち、日日、正しく南に向ひて坐し、大暑といへども、少しも、怠る容なかりき。　或る日、侍女、白衣の垢染みたるを見て、之を洗はんと、乞ひけるに、「罪人の垢衣をきるは、素より當然なり。」とて、遂に、洗はしめざりき。

君子ハ、其ノ獨ヲ愼ム。（大學）

謙遜

徳川家光、かつて、酒井忠勝を、駿河に封ぜんとせしに、「東照公の遺跡なれば。」とて、忠勝、之をことわれり。　又、甲斐に封ぜんとせしに、「武田氏の故址なれば。」とて、之をもことわれり。　家光、よりて、人をつかわして、其の封を、

ことわる所以を、問はしめければ、「厚き禄を得るは、おごりの本にして、却りて家を亡す基なり。」と答へしとぞ。

謙ハ、終アル道ナリ。自晦シテ、德益光ル。（省心雜言）

温和

小左衞門と、清右衞門とは、兄弟にして、親子夫婦及び孫など、一家合せて、五夫婦、七姪孫あり。すべて、十七人、同居しけれども、皆むつまじく、暮して、少しも、爭ふことなし。或る時、兄弟、相はかり、軒をならべ、家を造りて、別居せしに、兩家族のもの、「別居しては、樂しからず。」と、云ひければ、又、故の如く、同居せり。此の事、遂に、上に聞にければ、「うびをたまはれり。

和以ツテ、家ヲ克クス。（陸贄）

廉恥

熊代繡江は、長崎の通事にして、畫を善くせり。　或る豪商より、畫を乞はれけるに、三年を經ても、かかざりければ、或る日、豪商は、「畫をかきて、たまはらば、令孃のよめいりの費用を、差し上ぐべし」と、云ひけり。　繡江、大に怒り、「余は通事なり。　決して、畫工に非ず。　今、畫を以つて、女を嫁する資本を得るは、破廉恥の至なり。」とて、つひに、之をことわれり。

廉ハ、惡ヲ蔽ハズ。恥ハ、枉ニ從ハズ。（晉子）

果斷

天智天皇は、中大兄皇子と申し奉りける時、蘇我入鹿の、皇位をうかがひ奉るを察したまひ、藤原鎌足、蘇我石

川麿、佐伯古麿等と、三韓の使者、來貢の折に、之を誅せんことを謀り給へり。やがて、使者來貢し、皇極天皇、太極殿に、出御して、之を見給

ひけるが、古麿等、ためらひければ、皇子、機をはづすを見て、直に入鹿を斬り殺し、遂に、蘇我氏を滅し給へり。

君子ハ、幾ヲ見テ作ス。日ヲ終ルヲ俟タズ。（易經）

勉學

林信勝は、德川幕府の儒官にして、學問、甚、博かりしが、常に、時を惜みて、勉

強し、老年に及びても、少しも、たゆむことなかりき。　菅得庵、或る年の暮に、明春より、通鑑綱目を、講ぜんことを、乞ひければ、信勝、答へて、「子の心、まことに、之を欲せば、何とて、來年を待たんや。」と、云ひて、直に、除日より、講じ初めけり。

一寸ノ光陰モ、輕　ズベカラズ。（朱熹）

勉強

岡崎秀民は、醫を以つて、備前侯に仕へけるが、其のとなりに、青池三之丞と云ふものあり、射術に精を出だし、日夜之を習ひて、晴雨寒暑を、問はざりけり。　秀民之を見て、大に感じ、「我が業は、彼に比すれば、爲し易きに、怠りて、空しく日を送るは、何事ぞや。」と

て、其の後、大に刻苦せしが、遂に名高き醫者となれり。

時ハ得難ク、失ヒ易シ。心ニ悔ユルモ、何ゾ逐ハン。（邵康節）

節義

細川高國、ざんげんを信じて、香西元盛を殺しければ、其の弟柳本彈正、兵をあげて、來り攻め、高國、拒ぎて、大に

敗れけり。其の時、高國の家士、荒木大藏之丞、衆に向ひて、「危に臨みて、死を逃るるは、義に非ざるなり。我、留り死して、主を免かれしめん。孰か、よく我に從ひ、勇氣を出だして、たたかふものぞ。」と、云ひければ、衆、ふるひて、之に從ひ、共にはげしく戰ひて、遂に、打死し、高國、間を得て、近江に奔れ

り。

難ニ臨ミテ、苟モ、免カルルコト勿レ。（禮記）

勤業

伊藤小左衛門の家は、代代、農業をなし、かたはら、味噌を製造せしが、小左衛門、よく家業を勉強し、日夜、はたらきしかば、益繁昌に赴けり。然るに、大地震ありて、之が爲に、家破れ、業かたむきければ、小左衛門、三人の弟と、心を合せて、はげみけるに、程なく、又富を致せり。又、茶をうゑ、蠶をかひなどして、人をも益しけるが、之に由りて、己も、亦、大に其の富を増せり。

身ノ業ヲ、ヨク勤ムル人ハ、必、富ム。（貝原篤信）

注意

森蘭丸は、織田信長の近習にして、生

れつき、縝密なりき。或る時、信長、自、爪を切り、蘭丸をして、之を拾ひ棄てしむ。蘭丸、左右を索めさがして、久しく去らざりしかば、信長、

怪みて、之を問ふに、「爪片、すでに、九つを得たれども、未、一つを得ず。」と、答へり。信長、起ちて、衣を振ふに、はたして、爪片一つ、たちければ、信長、大に其の注意の密なるを賞せり。

微細ノ事ト云ヘドモ、苟モスベカラズ。

（言志録）

遵法

林子平は、幼少の時より、學問を好み、

國を憂ひて、力を海防の事につくしけるが、之が爲に、罪を得ることありて、其の家に、きんこせられけり。子平、かく罪を得ると雖も、少しも、上を怨むる氣色なく、常につつしみて、一室に端坐し、決して外に出づることなし。人、其の外出して、うつを散ぜんことをすすむれども、「きんこの身なれば」とて、國法を守りて、身を終るまで、閉居せり。

國家ノ法令ヲ、慎ミ守リテ、敢テ、犯スコト勿レ。（童子習）

義勇

段秀實、涇州の刺史たりし時、郭子儀、副元帥にして、其の子、晞、行營節度使なりければ、子儀を負みて、すこぶる、

暴行をなせり。　されば、人民、之を苦むと雖も、官吏、措いて問はざりしかば、秀實、其の士卒十七人を捕へ、首を斬りて、市門にさらせり。　他の士卒、之を見て、大に怒りさわぎ、まさに、攻めよせんとしければ、秀實、一人の僕を從へ、晞の軍門に至りて、諭しければ、是より、又、暴行するものなかりき。

自反シテ、ナホクンバ、千萬人ト雖モ、吾、往カン。（孟軻）

公益

平賀源内は、ひろく學問に通じ、公益を起すことを務めけるが、其の中にて、殊に、名高きものは、砂糖を製せし事にて、此の時まで、我が國に用ふる砂糖は、皆、外國より來りしなり。　我

が國にても、往往、之を製せしことありしが、大抵、失敗せしかば、源内之をうれひ、大阪の或る人に、其の法を教へて、製せしめけるに、成蹟よかりしかば。遂に、諸方にて製するに至れり。

其ノ財求ヲ阜ニシテ、其ノ器用ヲ利ス。國語

忠節

月岡左門は、上野城主重長の家士なり。重長、かつて、上杉憲政に降り、一室に押込められ、うつうつとして、日を送れり。或る夜、之を侍士に語りければ、左門進みて、「僕自刃して、主公の身をこもに包み、僕の屍の如くし、僕の屍をすつると偽らば、恙なく、門を出づることを得ん。」と、云へり。重長、之を止めて、聞かざりしが、翌朝に

至り、左門、果して自殺し居たりければ、其の計に從ひ、なんなく、門番をあざむきて、逃れかへることを得たり。忠ヲ盡シ、勞ヲ極メテ、死ヲ致ス。（國語）

勤王

菊池武時は、後醍醐天皇の御時に、少貳貞經、大友貞宗と共に、勤王の兵を、あげんことをはかれり。然るに、其

の事、未發せざるに先ちてあらはれければ、二人に、早く發せんことをすすむれども、二人、俄に、心を變じて、應ぜず。是に於て、武時、進み

て、筑紫の探題、北條英時をたろひ、之を殺さんとせしに、貞經、貞宗、大兵をあげて、英時を救ひければ、武時、大に敗れ、其の子に遺言して、自殺せり。君ノ難ニ赴クハ、忠ナリ。王事ニ死スルハ、義ナリ。（晉書）

河邨靖書
宮川直次郎刻

高等小學修身卷一　終

明治廿五年五月十六日印刷
同　年五月十七日出版

編輯者　重野安繹　東京市神田區袋町一番地
發行兼印刷者　八尾新助　東京市神田區錦町三丁目八番地
發賣所　八尾書店　東京市神田區表神保町一番地

版權所有